

華人の政治意識の変化

——「政治嫌い」、「イスラム嫌い」は解消されたのか

篠崎 香織 北九州市立大学

本報告では、半島部の華人について、近年あまり見られなかったいくつかの動向に着目して、そこに華人の政治意識の変化を読み取りうるかを検討したいと思います。

■ 華人の政治動向とメンタリティ、政党間提携をめぐるこれまでの定説

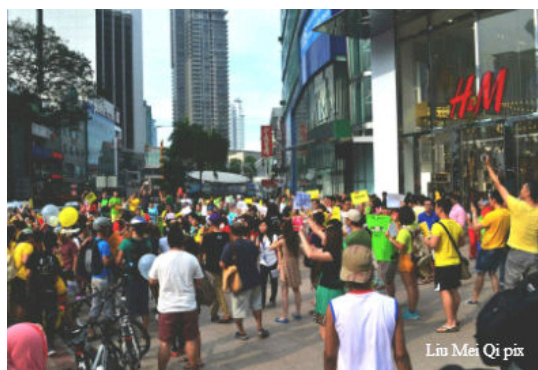
過去10年くらいの間のマレーシアの政治における華人の動向について、レベルが異なる話ではありますが、以下の二つのことが広く指摘されてきたように思います。

一つは民主化に関する議論です。マレーシアやシンガポールの「謎」として、中間層が拡大しつつあるのに民主化が進展しないという議論があります。これに関してマレーシアでは、「ディベロップメンタリズム」というメンタリティの存在が指摘されてきました。その概要は、「マレーシアの中間層は民主化よりも生活の安定に価値を見出し、経済発展と安定をもたらす強い国家を希求するメンタリティがある。安定していれば強権的な政治を受け入れて、民主化を強く希求しない。政治には無関心で、経済的な充実や安定を求める」というものです。

とくに華人については、政治や社会のあり方がマレー人優位となっているにもかかわらず、そうした状況を変更しようという積極的な働きかけがあまり見られず、政治に無関心である、あるいは保身のためにそう装っていると言われてきました。

もう一つは、政治をめぐる提携関係の可能性に関する議論です。1999年総選挙の前後に野党間で協力・提携の試みが始まり、同年PAS、Keadilan (PKRの前身)、DAPが野党連合BAを結成しました。しかし、イスラム国家の建設を志向する発言をPASが強めたため、2001年にDAPが提携からはずれ、BAも解消しました。

この時以降、「華人はマレーシアがイスラム教国となることに強い抵抗を感じているため、マレーシアのイスラム教国化を目的として掲げるPASを支持しな



資料31 「若者が『五月五 換政府』を叫び、Lot10に200人が集まる」

2013年4月28日、<http://www.malaysiakini.com/news/228359>

い」ということが、マレーシアの政治の可能性を考える上で前提とされてきたように思います。

今回の総選挙では、以上の二つの視点があてはまらない現象が見られたように思います。その意味を検討したいと思います。

■ 「5月5日 政府を換える」 ——公然と声高に政権交代を叫ぶ華人

まず、民主化に関する議論と関連する部分です。今回の総選挙では、華人が政権交代を公然と声高に叫んでいました。こうした光景は、最近の総選挙ではあまり見たことがないものです。

選挙運動の期間中に華人が最もよく口にしていたのは「五月五 換政府(5月5日 政府を換える)」という華語のスローガンでした。これはもともとDAPが華人をターゲットにしたチェラマで使っていたものですが、その枠を超え、DAPによる動員がない場でも人びとが何かにつけて口にする言葉となりました。

たとえば、クアラルンプールの繁華街にあるLot 10というショッピング・センターの前で若者が「五月五 換政府」を呼びかけたという報道があります(資料31)。これは政党が動員した場ではなかったようですが、そこでもこの言葉が使われていました。こうした光景は、少なくとも前回の総選挙ではほとんど見たことがありません。

■ 明確には意識されてこなかった 政権交代の可能性

前回の総選挙のときにDAPは「改國運、你決定！（国運を変えるのはあなた）」というスローガンを作りました。しかし、DAPが動員した集会でこのスローガンが唱えられることはありましたが、それ以外の場でこのスローガンが広く唱えられることはありませんでした。「国運を変える」という文言はどこか漠然としていて、必ずしも政権交代まで踏みこんでいない印象を受けます。

2008年総選挙でクアラルンプールとスランゴールでは野党が大きな躍進を遂げましたが、私の周りの華人の友人や知人はその結果に一様に驚いていました。2008年総選挙のときには連日メディアでBN優位が報道されていて、大部分の人が大きな変化はないだろうと踏んでいました。こうしたなかで、政権交代を実現することを必ずしも強く意識していないけれど、どうもBN優位らしいので、自分が反対票を投じないと現状が維持されてしまうと思った人たちが予想以上に多くなったという感じでした。選挙結果に最も驚いたのが投票者自身という感じで、スランゴール州では野党による州政権が発足しましたが、投票者自身がその展開に戸惑いをあらわにしていました。

ペナンはクアラルンプールやスランゴールと少し状況が違い、投票日前に「MCAとGerakanは今回の選挙ではもうダメだ」と言っていた人が少なくありませんでした。でもそれは、それぞれの場でそれぞれ言われていたことで、それぞれの場を横断して人びとが広くその感覚を共有するという感じではなかったように思います。

■ 街頭へ繰り出す華人——ブルシへの参加が漸増、 選挙直後の集会にも多数が参加

華人は1998年に始まるレフォルマシ（reformasi、改革）以降、あるいはもしかしたら1987年のラン作戦（Operasi Lalang）以降、街頭に繰り出して公然と政治的な主張を訴えることはほとんどしてこなかったように思います。そうした状況は2008年総選挙直前まであったように思います。

たとえば、公正な選挙の実施を掲げる「ブルシ（Bersih）」という活動に、最近は華人も若い世代を中心に大勢が参加していますが、それが2007年11月に行なわれたときには、多くの華人が冷ややかな見方をしていました。「あれは野党に組織されたマレー人の活動だ。交通渋滞を引き起こすばかりで、日常生活に

支障が出て困る」という雰囲気が支配的でした。それが2008年総選挙以降、回数を重ねるごとにブルシに参加する華人が増えています。

今回の総選挙の直後、5月8日にPRが大規模集会を実施したときも、若い世代を中心に多数の華人が参加していたようです。今回の総選挙は、マレーシア史上初の政権交代もありうるとして内外の注目を集めており、この機会に賭けようと考えた人も少なくなかったようです。しかし政権交代は現実とはなりませんでした。

今回の総選挙では、投票・開票が進行するのと同時に、「今まさに不正が行われている」といった書き込みがネット上で大量に流通していました。たとえば、投票を済ませた人が指につけるインクが「簡単に消えないと説明されているけど簡単に落ちた」とか、「外国人を乗せたバスが投票所に到着した」とか、「投票用紙の入った投票箱が置き去りにされている」とか、そういった書き込みがネット上に溢れていました。

そうしたなかで、今回の総選挙で政権交代が起らなかったのは選挙のやり方が公正さを欠いていたからだという思いを抱く人がかなりいたようです。5月8日の大規模集会では、やるせなさのはけ口を求める人たちが大勢集まるかたちとなったようです。

■ 変化を実現する場が街頭だとは考えず 選挙への積極的な関わりを求める

華人は街頭に出て「政権交代」を公然と叫ぶようになりましたが、現時点ではその多くが、現状を変える場は街頭だと考えていないようです。現状を変える働きかけは、選挙という定められたルールや制度に則って行なうべきだという考えが広く共有されているように思います。

今回「政権交代」を叫ぶ人たちは、一人ひとりが投票権を行使するよう呼びかけていました。選挙権登録をしていない人には登録を呼びかけ、投票日には必ず投票に行くよう呼びかける。そんな働きかけが非常に顕著に見られました。

そうした呼びかけは、マレーシアに背を向けることの多かった海外在住者にも及びました。選挙のために帰郷して票を投じたシンガポール在住のマレーシア人は、今回はとりわけ多かったようです。シンガポールとマレーシアの各地を結ぶバスを運行するシンガポールのバス会社の関係者によると、「旧正月のときでさえ、これほど多くのマレーシア人が一度にシンガポールからマレーシアに帰ったことはない」ということです。

マレーシアの外で自らの前途を開拓しようという人のなかには、マレーシアに対して諦めの気持ちを持ち、マレーシアを半ば見限っているような人も少なくありません。今回はそうした人たちが、これまでにない規模で広く選挙に関わったと思います。

■ 不正に投票権を得たとされる人びとを排除しようとする動きも

投票権を持つ人を広く動員しようとする働きかけがあった一方で、投票権を持つ一部の人たちを投票から排除する動きもありました。「政府はBNへの投票を条件に外国人にマレーシア国籍を与え、バスを手配するなどしてその人たちを組織的に投票に動員している」という内容の書き込みや動画が、インターネット上やSNSに相次いで投稿されました。こうしたなかで、不正に投票権を得た人たちの投票を阻止すべく、できるだけ早く投票所へ行き、自分の投票が済んだ後も投票所に残って投票所を監視しようという呼びかけがあちこちで見られました。

外国人らしき容貌の人が投票所で大勢の人に囲まれて、「マレーシア国歌を歌え」と要求されたり、「IC (Identity card) を見せろ」と要求されたりしました。なかには、産みの親はインド系だが養父母が華人であるため華人名を持つ人物が、偽のICを使っているとして投票所から閉め出され、政府に苦情を訴えるケースもありました。

こうした「監視」について私が確認したのは主に華語でのやりとりで、華人の間でかなり積極的に「監視」が行なわれていたことがうかがえます。華人以外にもこうした「監視」の動きがあったのか、ご存知の方に教えていただけると幸いです。

マレーシアではこれまでも外国人労働者に対して否定的な見方がありましたが、今回の総選挙でその見方は一層強まったように思います。華人には外国人の雇用主も少なくないので、事情は複雑だと思います。

華人は、自分たちの出自が社会の外部にあることを根拠に、社会の正当な一員として認めてもらえないという思いを抱いています。そのような思いをしている華人たちが、条件を満たしてマレーシア国籍を新たに付与された人たちを社会から排除しようとする事態が起こりつつあります。あるいは、華人はどんなに努力しても、自分たちはともすると多数派から排除される存在だという思いがあるからこそ、新たに社会の一員となろうとする人に対して厳格に対応してしまうのかもしれません。



資料32 MCAの広告

2013年4月21日、<http://www.malaysiakini.com/news/227526>

■ 2006年ごろまで顕著に見られたPASに対する華人有権者の抵抗感

次に、マレーシアの政治をめぐる提携関係の可能性についてお話しします。「マレーシアがイスラム国になることに対する華人の抵抗感は強い」と、イスラム国の建設を目標に掲げるPASが華人票を獲得するのは難しい」という見方が、2004年あたりまでかなり一般的だったように思います。それを踏まえてMCAが今回の総選挙でメインに打ち出したのが資料32の広告です。

この広告の上の方には、「DAPを支持することはPASを支持することだ」と書かれています。真ん中には、まず「そうしたらあなたはもうコンサートが見られない」とあり、その下に「女性芸能人がいない」、「映画館がない」、「娯楽がない」、「外国人芸能人がいない」と書かれていて、さらにその下に「DAPはあなたの権益を守らないだろう」とあります。右下には、「賢明な投票を。DAPへの一票はPASへの一票」と書かれています。同様の内容の英語版の広告もありますが、主にこの華語版の広告が華人の間で批判にさらされていました。

「PASに投票するとマレーシアはイスラム国になってしまう。だからBNを支持しよう」といった呼びかけは、確かに一時期は華人に対してかなり有効だったようです。1999年にBAが結成されたものの、PASがマレーシアのイスラム国化を志向する論調を強めたため、華人を主な支持層とするDAPがBAを脱退した経緯がありました。

2001年のアメリカ同時多発テロ以降、マレーシア国内の華語新聞はPASに対して批判的な論調を強めました。アメリカがアフガニスタンに対する軍事行

動を開始したとき、マレーシア政府は、「アメリカの軍事行動には反対だが、テロには断固反対し、アフガニスタンのジハード（聖戦）の呼びかけは支持しない」と表明し、華語新聞はこの方針を支持しました。これに対して、「PASの指導者はアフガニスタンのジハードを支持している」と報道されました。

さらには、マレーシア国内で殺人や強盗、軍の武器略奪などに関わったとされるマレーシアのイスラム教組織の指導者がPASの精神的指導者ニック・アジズの息子であると報じられました。こうしたなかで、華語新聞のPAS批判が強くなりました。このような報道を受けて、華人の間にはPASに対する批判的な見方が広まりました。

2006年9月にクアラルンプール・スランゴール中華大会堂で行なわれた座談会で、リム・グアンエンが聴衆に対して、「1999年にDAPがPASと協力したことを許してくれましたか」と尋ねています。このころまでは、DAPがPASと協力することに対して華人有権者の間に抵抗感があったことがうかがえます。

■「月が私の心を映す(月亮代表我的心)」

——政党ロゴ使用不可の危機を回避した連携

今回の選挙では、「華人はPASを支持しない」という見方が必ずしも当てはまらない状況が見受けられました。その象徴的な言葉が、「月が私の心を映す(月亮代表我的心)」と「ロケットは月に着陸した」です。

公示日の2日前の4月18日、結社登録局からDAPに「2012年12月に行なわれたDAPの党役員選挙に問題があると思われるため、現在の党役員を認めない」という通告が突然なされました。これによってDAPは、今回の総選挙で党のロゴを使用できなくなるおそれが出てきました。

マレーシアでは投票用紙に候補者の名前とシンボルが印刷されており、支持する候補者に×印を付けます。そのため候補者は名前とシンボルを前面に押し出して、有権者に支持を訴えます。シンボルは選挙委員会が事前に定めた身近な動植物や日用品の絵の中から選ぶことになっていますが、政党が事前に申請し同委員会が承認すれば、政党のロゴを使うこともできます。ただしそれには条件があり、政党は結社登録局に登録を認められていて、政党のロゴの使用を承認する政党からの文書を候補者が選挙委員会に提出する必要があります。

結社登録局からの通達は、DAPの党役員が党のロゴ使用を許可する文書を出候補者に出しても、選挙委

員会がそれを受理しない可能性があることを意味するものでした。そうなれば、DAPの候補者は、1960年代から掲げてきたロケットをモチーフとする同党のロゴではなく、選挙委員会が定めたヤカンやネクタイなどのシンボルのもとで、あたかも無所属の候補者のように、DAPという政党など存在しないかのように選挙戦を戦わねばなりません。

DAPはPASやPKRと協議し、DAPのロゴがシンボルとして使用できない場合、半島部では月をモチーフとするPASのロゴを、サバとサラワクでは目をモチーフとするPKRのロゴを、それぞれ自身のシンボルとすることを決定しました。

このことが発表されるや否や、SNSやインターネット上に華語の書き込みが多数現れました。テレサ・テンの名曲「月亮代表我的心(月が私の心を映す)」を引用したり、「ロケットはついに月に着陸した」などと言ったりして、DAPの候補者がPASのロゴを使用することになってもそれを受け入れるよう訴える声が挙がりました。MCAの選挙広告「賢明な投票を、DAPへの一票はPASへの一票」には、「たしかに賢明な選択だ」、「宣伝してくれてありがとう」などのコメントが書き込まれました。

MCAは「賢明な」を「間違った」という文言に替えて広告を打ち出し直しました。しかしこの対応はかえって「MCAが華人に訴えうるものはこれくらいしかないのか」と受け取られてしまいました。

■ PASも許容範囲とする言説には 少数派としての戦略の側面も

今回の選挙で、華人のなかにはPASも十分に許容しうろという声が多々見られました。華人はもはやイスラム教に対してかつてほどの拒否反応を持っていないことを指摘する新聞などの論説記事もしばしば見受けられました。

PASが目的として掲げるイスラム国の設立に関しては、「マレーシアがイスラム国になっても、イスラム法やイスラム刑法は非ムスリムには適用されないのだから、華人は何も恐れることはない」という声や、「イスラム刑法は非常に厳格だが、悪いことをしなければ何も恐れることはない。最近治安が悪化しているため、厳格な刑罰を設定するのはむしろよいことだ」などという声がよく見かけられました。

昨今のマレーシアでは、主流派を占めるマレー人の票が与野党に分裂していて、少数派の華人やインド人の票が重要になる場面が多々あり、マレー人の代表

者が少数派の意向も考慮しなければならない状況があります。こうした状況は少数派にとって都合がよく、そういう状況を維持するため華人が「PASも許容範囲」と言っている側面もあるように思います。

■ 代表はMCAやGerakanである必要はない ——華人の意識変容と「民族の連邦制」の行方

華人はこれまでMCAあるいはGerakanを華人社会の代表者ととらえ、代表者を政府に送ってきました。華人の関心が高い案件を扱う省庁の大臣や副大臣にMCAとGerakanの指導者が任命されてきました。地方レベルにおいても、郡議会や市議会の議員や新村の村長のほとんどがMCA（一部Gerakan）から出されていました。MCAやGerakanが代表者として政府の各レベルに存在することで華人は政府に代表者を立てるという仕組みが成り立っていました。

今回の総選挙では、MCAとGerakanに対する華人の支持は非常に低いものとなりました。MCAは半島部で下院議会に37人の候補者を立てましたが、当選者は7人でした。Gerakanは11人の候補者を立て、当選者は1人でした。MCAとGerakanはこれを受けて入閣しないと表明しています。また、MCAは地方レベルの政府の役職も受けないとしています。こうした状況に不安の声が聞こえる一方で、別にたいした問題ではないとする声も聞こえてきます。

「たいした問題ではない」理由はいくつかあるように思います。まず、大臣・副大臣職など中央レベルでの華人の代表者については、彼らがいることで得られる利益があまり実感されていないようです。むしろ、大臣・副大臣という職にありながら華人の利益を守る役割を果たしていないと評価されているようです。

華人は政府に代表者を送らねばならないと思いますが、代表者はMCAやGerakan関係者である必要はなく、野党や民間組織から代表者を任命すればよいとの声が聞かれます。華人が強い関心を寄せる事柄に華語で教育を受ける権利の保障があり、そこでは華語小学校の理事連合会が大きな影響力を持っていて、MCAを介さず直接政府とやりとりすることもあります。野党が州政権をとった州では華文独立中学に財政的支援が提供されることもあり、野党の州政権との関係が重要になるケースも増えているようです。

「民族の連邦制」は華人社会に関しては今後もしばらく存在し続けるでしょうが、どの公権力と誰を介して結ぶかは複雑な様相が展開されていくことが予想されます。